



紫陽花

MISTY

もう少しで家に帰つくとところで、とどろ雨が降り始めた。立ち込めた霧のように細かな雨は、またたく間に紫陽花の花びらを水滴で潤し、道は水底に沈んでしまったような静けさである。道りは薄暗く、道を囲む色とりどりの紫陽花の色だけが妖しく光って見える。『..この時期こうい雨が降ると、自分がどこにいるのかも分からなくなるよ。普段は閑散とした通り慣れた道が、この藍や赤の紫陽花が咲き始めると景色がまるで違って、いったいどこをどう歩いているのか…何か…妙な感じがしてくる。去年もいつだったか帰り道、裏の空き家に何時間も迷いこんでいたら、あの家の庭も紫陽花が、まるで狂い咲いていた。』

雨の上がった日曜日、散歩に出かけた小町通りで偶然出会った友人と、馴染みの珈琲店で紫陽花見物の観光客でにぎわう通りを眺めていると友人がなにか思い出したように話し始めた。

「紫陽花が人の屍骸の上に花を咲かせるという話。知っていたかい？」

「いや…」 「じゃ、教えてやろうむかし、何百年も前の話だ。戦い終わった戦場に見渡す限り切られて死んだ武者達の屍骸が残された。するとその内その場所一面に藍や赤の紫陽花が見事に咲いたそ。その色の尋常ではない鮮やかさに、村人達は、紫陽花は武者達の流した血を吸って花を咲かせたに違いないと話し合った。紫陽花には無念に死んだ武者達の恨みつらみがこもっているとね。鎌倉には紫陽花が多い。何しろここには何千とい武者の屍骸が今でも捨て去られて埋まっているのだから。そうそう紫陽花に酒を撒いてやると武者の怨念が晴れるという話もある。」

「……そか。」 「なんだい？ 深刻な顔をして。」

「俺は確かに、紫陽花には不思議な妖力があると思うよ。あれが咲き始めるとどう先具合が悪い。やたら道に迷ったり。…どう先紫陽花の花の中を歩き回っているらしいんだが。言われてみると家の裏山には、追い詰められた武将が女子供までを道連れに自殺したとい首切りやくらがあるよ。」

「あは、君らしいな。だけど今のは僕の作り話だよ。君は、こういう話に弱いだろ？ 脅かしただけさ。だいたい君は昔からよく知ったところでも道に迷う癖があって、僕らはよく待ちぼうけを食ったものだけど、それもみな紫陽花のせいなのかい。鎌倉に紫陽花が多いのはね、商い上手な寺の和尚のせいさ。境内いっぱい紫陽花を植えたのさ。ここ最近の事だよ。」

「しかし、たとえば、その逆も考えられるじゃないか。その和尚はもともと紫陽花の妖力を知っていた。だから境内一面に紫陽花を植えた。するとその不思議な妖気に迷って人が押し寄せた。…ようするにその和尚も妖力使って事だ。」

「妄想だよ。それは。あの見物客達が皆紫陽花の妖気に誘われて来たと言うのかい。大丈夫か？ 近頃少し疲れているだろう。気を付けた方がいいよ。」

外は、いつのまにか空に黒い雲がのしかかり、どんよりと重い雨が降り始めていた。それから、その話は彼の頭から離れなくなった。帰宅が遅くなる事が多くなり、体調もすぐれず、なにやらぶつぶつと独り言を言うことが多くなっていった。

7月に入ればばかりの、ある晩の帰り道。またあの霧雨が音もなく降り始めた。その時、雨に濡れて光る紫陽花の中で、彼はたしかに何かを見、何かを感じたのだ。翌朝、彼は自宅近くの紫陽花の植え込みの中で仰向けになって倒れているのを発見された。右手に古びた日本刀を持ち、左手には空になった酒瓶を手にして…紫陽花の植え込みは、滅茶苦茶に切りつけられ、

刀には色とりどりの紫陽花の花びらが雨露に濡れてべっぴんとこびりついていた。彼が、紫陽花の花の中で何を見たのか、なぜあの刀を持っていたのか、もげだれも、彼の口から聞く事はできなかった。



COLUMN

鎌倉の猫事情 その三

そうです。あのカラスどもが町へやって来るまでは、この辺りの屋根の上には平和で秩序に満ちた暮しがありました。ボス猫であるあのお向いの白猫が威厳に満ちた態度で屋根の上に寝そべり、ちらりと廻りを見渡すだけで、その邪魔をしたり、やっかい事を起すものはだれもいませんでした。当時、近所にでっかい茶色のトラ猫もいましたが、彼はその姿形に似合わず、争いやもめごとを嫌い、ヨレクホールの裏手にある、看護婦さんたちの住む寮の塀と屋根を領分として静かに暮らしていました。町の古顔の黒白のブチ猫のマリちゃんは高い所を好まず、小町通りからヨレクホール前に抜ける裏道を歩き回っていました。マリちゃんはむしろ人間との交際が広く、裏道のアイドルとして親しまれ、町内の猫の中でマリちゃんの名だけは知られていました。だれかに道中で「マリちゃん」と声を掛けられると、マリちゃんの方でも愛想よく返事を返していたものです。ヨレクホール前の道は小町通りへのバイパスとして商店街の生命線といべき重要な役目を果たしています。ほとんどの商店が小町通りに集中していますが、小町通りは狭く、配送の車と観光客と地元の買い物客でいつも交通はマヒ状態です。ですから商店の仕入れや配達、郵便やさんなど急ぐ人達は自転車やバイクでこの裏道を走り抜けていきます。この裏道は地元で働く人達の道なので、人も猫も顔馴染みになるわけです。もちろん、この裏道に長く住んだヨレクホールのシュガーちゃんも古株猫の一匹には違いないのですが、美味しい餌に釣られたのかどうか、過去に一年あまたの間、この裏道を離れてよそのご主人に飼われていた事がありました。そのご主人は一風変わった人で、立派な黒猫に首輪と鎖をつけて、よく夕暮れの町を散歩しているのを見かけられていましたが、その途中でシュガーちゃん知り合ったのでしょ。一年後シュガーちゃんが家に戻ると、ヨレクホールにまで迎えに来られたほどでしたが、私達はきっぱりと断りました。その事は、シュガーちゃんの若気の至りではありますが、ご近所では、人も猫も知らぬものはなかったでしょうね。



to be continued

INFORMATION

情報をお寄せ下さい……

ヨレクホールタイムスに、あなたの聞いた不思議な話、面白い話、耳寄りな情報などをお寄せ下さい。お待ちしております。

Fax 0467-22-1179
E-mail info@milkhall.co.jp

